

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：13601

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K18691

研究課題名(和文)観光行動における歩くことの心理過程と自己過程に関する研究

研究課題名(英文)A Social Psychological Study of Walking as Self Process

研究代表者

岡本 卓也 (OKAMOTO, Takuya)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：30441174

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、旅や観光においてなぜ人は歩くことを求めるのか、「道(街道・巡礼路・フットパス・登山道)」を歩くことの意味づけについて明らかにする事であった。上記の目的を達成するため(1)フットパスの管理者や利用者に対する調査、(2)英国におけるフットパス普及に関する調査、(3)徒歩巡礼者、山行者に対する調査、(4)街道観光における徒歩観光者と自家用車観光者の比較調査などを行った。その結果、歩くことで地域の住民との相互作用が活性化し、そのことが自己過程に重要な意味を持つこと、また、地域内における道の管理の構築や地域間の連携を背景とした整備が進むことで歩く観光は促進されやすいこと等が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

旅や観光行動における徒歩動機、歩行中の認知変容、感情経験の変遷、徒歩経験が後の自己過程に与える影響について明らかにすることが、今後の観光地振興を考える上でも必須である。また、「道」の活用が地域アイデンティティを高めるという事例報告はあるが、そのメカニズムについては解明されていない。道を歩くことの心理機能を明らかにした上で、地域における「道」の価値の再検討、活用のメカニズムを明らかにする必要があるだろう。これらの知見は、歴史的資源・自然景観資源に乏しい地域の観光地振興にも役立つ。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify why people chose to walk during travel and tourism, and the meanings of walking along "roads (highways, pilgrimage routes The purpose of this study was to clarify why people seek to walk in travel and tourism, and to clarify the meaning of walking on "paths (highways, pilgrimage routes, footpaths, mountain trails). In order to achieve the above objectives, we conducted (1) a survey of footpath managers and users, (2) a survey on the spread of footpaths in the UK, (3) a survey of pilgrims and mountain climbers on foot, and (4) a comparative survey of tourists on foot and tourists in private vehicles during tourism. As a result, it was confirmed that walking activates interaction with local residents, which has an important meaning for self-processes, and that walking tourism is easily promoted by the construction of path management in the region and the development of paths with the background of cooperation between regions.

研究分野：社会心理学

キーワード：歩くこと フットパス 巡礼 ウォーキング 道 自己過程 観光行動

1. 研究開始当初の背景

本研究のリサーチクエストは、旅や観光においてなぜ人は歩くことを求めるのか、また、「道(街道・巡礼路・footpath・登山道)」を歩くことには、どのような心理的機能があるのか、という問いである。

近年、信仰心に基づかない徒歩巡礼の増加(星野・他, 2012)や、ロングトレイル(米国)、フットパス(英国)、オルレ(韓国)などの新しい歩く文化が海外から紹介され、各地に広がっている(原, 2015)。一方で、多くの観光者が選択する観光行動のパターンは、観光スポット間を自家用車や公共の乗り物を利用して移動する、点(観光スポット)と点を繋いだ観光が多い。これまで、山行者を対象に行った研究において、長距離歩行によって得られる達成感や安寧感のメカニズムが、山行動機のタイプによって異なること(岡本, 2015; Okamoto, 2017) や、観光スポットを巡ることのみに価値を見出す観光旅行者と、スポット間の移動も含めて価値を見出す観光旅行者がおり、それらの違いが、観光情報の処理プロセスや観光情報の発信内容に違いがあったこと(岡本・他, 2016)などが指摘されている。また、徒歩巡礼者の時間感覚や環境認知の変容や、自己過程(中村・1995)の発展の可能性についても可能性が指摘されつつも、実証的なレベルで検証した研究は行われていない。以上のことから観光行動において歩くことに伴う自己過程の変化について、実証的に検討する必要があると考えた。

2. 研究の目的

以上のことを踏まえ、本研究では旅や観光行動における徒歩観光動機、感情経験の変遷、徒歩経験が自己過程に与える影響、フットパスやロングトレイルの普及実態、普及の過程における地域住民と観光客の相互作用の効果を明らかにする事を目的とした。具体的には次の4点である。

- (1) 徒歩巡礼者と接待者の相互作用の実態と、巡礼動機と自己過程の関係を検討すること
- (2) 街道観光における徒歩観光者と自家用車観光者の心理的相違点を明らかにすること
- (3) フットパス・ロングトレイルの管理実態、利用実態、利用動機を明らかにすること
- (4) 英国におけるフットパスや巡礼路の利用実態や普及の過程を明らかにすること

3. 研究の方法

(1) 徒歩巡礼者と接待者の相互作用の実態と、巡礼動機と自己過程の関係に関する調査

① 四国遍路の徒歩巡礼者に対して、巡礼行動の動機および巡礼中の心的変化、人生移行における意味についての聞き取り調査を行った。

② 四国の遍路道の接待小屋の運営者に対して、接待の動機や、接待をすることで得られる心的効果について聞き取り調査を行った。

(2) 街道観光における徒歩観光者と自家用車観光者の心理的相違点に関する調査

中山道を歩いて観光する徒歩観光者と、中山道の宿場町間を自動車で移動するスポット観光者が、観光旅行中に経験する感情変化や、ストレスの変化を調査するため、それぞれのスタイルを採用する旅行者を対象に、唾液中ストレス値(唾液中コルチゾール量、IgA)の測定、また経験的サンプリング法(ESM(尾崎・他, 2015))によって観光地や道中での感情経験や時間感覚の継時的変容を測定し、Photo Eliciting Narrative Approach: PEN-A(Okamoto, 2011))によって空間認知の特徴や変遷を測定した。

(3)英国におけるフットパスの利用実態や普及過程に関する調査

①イギリスのフットパスについて、その利用実態や近隣住民による管理の在り方について文献調査および面接調査を行った。

②ロンドンで近年整備されつつある、ロンドン近郊のウォーキングルートおよびそのツアープログラムについての巡検を行った。

③ウェールズ地方にあるフットパスが巡礼路として地域住民に再認識される過程について巡検を行った。

(4)フットパス・ロングトレイルの管理実態、利用実態、利用動機に関する調査

①先進的取り組みを行っている美里フットパス管理者およびフットパス周辺の地域住民に対して、フットパス事業の評価に関する聞き取り調査を実施した。また、黒内松町フットパス管理者および日本フットパス協会の関係者に面接調査を行った。両フットパス周辺の地域住民に対して、フットパス事業の評価に関する聞き取り調査を実施した。

②ロングトレイルの取り組み実態を明らかにするため、現在トレイル整備を進めているみちのく潮風トレイル管理者およびトレイルルート周辺の地域住民に対して、トレイル事業の認知や評価に関する聞き取り調査を実施した。また、日本で最初に整備されたロングトレイルの1つである信越トレイルボランティアに聴き取り調査を行った。

③フットパスやロングトレイル利用実態を確かめるため、Web調査(N=500)を実施した。具体的には、歩行者としての参加経験や管理者側としての経験について、過去の旅行経験や観光熟達度、旅のリピート行動との関連について質問した。

4. 研究成果

(1)徒歩巡礼者と接待者の相互作用の実態と、巡礼動機と自己過程の関係に関する調査

徒歩巡礼者に対する面接調査の結果、定年や卒業、仕事の解雇など、「今が人生の節目である」という意識が、歩き遍路のきっかけになっていることが最も多かった。その際、長い期間歩くことで生まれる、これまでの日常生活では出会わなかったであろう肩書きや属性の人との交流が自己過程において重要な意味を持っているようであった。これまでの環境から、新しい環境へと適応を迫られている(と感じている)がゆえに、この経験が補助階段のように機能しているのではないだろうか。また、世代ごとで歩ききっかけを整理してみると、岡本・藤原(2015)の研究で指摘されている登山への意味づけと発達課題の関係に類似している。

また、いわゆる観光資源の少ない地域であっても、遍路道があることで多くの人がある地域を訪れることが、地域住民のシビックプライドにポジティブな影響を与えていることが確認された。特に、歩き遍路者に対してお接待を行う組織は多くの地域に存在しており、後継者問題などの問題を抱えているものの、それが生きがいになっていることに加え、メンバーを増やそうとすることで地域への関心の拡がりを見せていた。

(2)街道観光における徒歩観光者と自家用車観光者の心理的相違点に関する調査

徒歩観光者と自家用車観光者を対象とした比較調査を行った。その結果、前者は後者よりも旅行の最中に高いストレス反応を示す傾向にあるが、それは短期的な現象であり、宿泊地について一休みするなど一定の時間後には、前者の方が後者よりもストレス値が低くなる

傾向が示された。また、その傾向は翌日まで続いていた。また、自家用車観光者が写真に多く撮っている内容が、風景や建築物という対象であるのに対して、徒歩観光者は対象に接近した写真を多く撮る傾向が示された。歩くことで一つの観光地に長い時間滞在する結果、その関心の対象がマクロなものからミクロなものへと変化する可能性が示された。また、その後の聴き取り調査でも、自家用車観光者よりも精緻かつ長い時間の思い出話が語られた。

(3)英国におけるフットパスの利用実態や普及の過程に関する調査

英国では、とくにフットパスに関連した地域住民主催の小規模なイベントによるウォーカーのもてなしが利用者との相互作用や、再訪意図を高めていることなどを確認した。イギリスでは、自分たちの住む街を通るウォーカーに対して様々なサービスを提供する取り組みも行われており、現在ではこのような“walkers are welcome town”を掲げる街は 100 を越えている。このような取り組みが、フットパスを歩く人に対する満足度を高めているだけでなく、地域のソーシャルキャピタル形成にも影響を与えていることを確認した。

また、ロンドン近郊での、新しいウォーキングプログラムは、地下鉄駅など公共交通機関と歩くことを繋いだ仕組み作りを展開していることなどを確認した。こういった取り組みが、歩く人の増加の背景にあると考えられる。

また、英国ウェールズ地方にあるフットパスの一部が、歴史的には Penrhys Pilgrimage Way という巡礼路であったことが近隣住民に認知されるという事例があった。地域の教会と他の地域の教会を結ぶ巡礼路を周知、関連する地域間に普及する過程で、SNS 上でのメンバーの拡充や各種小規模なウォーキングプログラムを開催することが重要な役割を果たしていた。近隣住民は、地元の教会を起点に他の地域の教会までの日常的に利用していた道が、巡礼路として利用されていたことを知ることで、他地域との交流が意識され、道を歩く人の増加にも役立っていた。

(4)フットパス・ロングトレイルの管理実態、利用実態、利用動機に関する調査

日本国内でのフットパスやロングトレイルに関して、その認知度はいずれも 10%程度であり、認知している人の内、歩いたことがある経験率は 15%~25%程度であった。イギリスでのフットパスの認知度や利用頻度に比べると、日本国内での知名度、利用頻度が圧倒的に低い。また、巡礼路に関しては、宗教的巡礼路の認知度は 30%程度で、アニメ聖地巡礼の認知度は 50%近かった。一方で、それらを歩いた経験については、10%程度であった。フットパスやロングトレイルの方は知名度が低いものの、知っている人の経験率が高く、今後の広報の在り方の重要性が指摘される。

また、フットパスやロングトレイルの管理関係者や、管理ボランティアの話からは、地域内における道の管理の構築や地域間の連携を背景とした整備が進むことで、歩く観光が促進されやすいこと等が確認された。

図 1 は、フットパスや巡礼、ロングトレイルなどについて、その背景や利用者の意識の違いを纏めたものである。

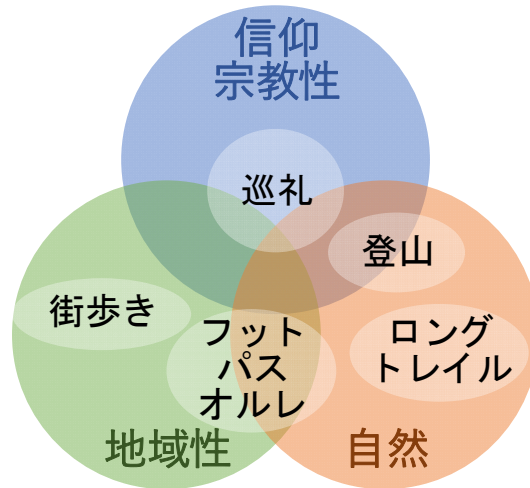


図1 巡礼，ロングトレイル，フットパス，登山のまとめ

<引用文献>

星野英紀・他 (2012). 聖地巡礼ツーリズム. 弘文堂

原雄一(2015). クラウド道コモンズによる歩くツーリズム 日本地理学会

尾崎由佳・他(2015). スマートフォンを使用した経験サンプリング法 21 世紀 HIRC 研究
年報, 12, 21-29.

Okamoto, T. et.al. (2011). Photo eliciting narrative approach as a new interview
technique. The 13th ECP.

岡本卓也・他(2015). 登山行動に関する社会心理学的研究 関西学院大学社会学部紀要, 120,
167-180.

Okamoto, T. (2017). Hiking motivations and emotions on the mountain top. AASP 2017.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 岡本卓也	4. 巻 23(2)
2. 論文標題 「道」と「歩くこと」の社会心理学(2)：コミュニティと道	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 コミュニティ心理学研究	6. 最初と最後の頁 87-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 林 幸史	4. 巻 35
2. 論文標題 観光写真調査法による観光地の魅力評価	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 50～60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14966/jssp.1819	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 林 幸史	4. 巻 50
2. 論文標題 観光写真調査法で地域の魅力を再発見する	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 交通科学	6. 最初と最後の頁 18～23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34398/kokaken.50.1_18	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岡本卓也	4. 巻 6
2. 論文標題 「道」と「歩くこと」の社会心理学(1)：国内のロングトレイル，フットパス，オルレの現状と可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信州大学人文科学論集	6. 最初と最後の頁 95-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 林 幸史、小杉 考司	4. 巻 34
2. 論文標題 過去の旅行経験からみた観光地イメージ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 38～46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14966/jssp.1627	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 岡本 卓也・前田 智子
2. 発表標題 地域効力感が居住地域への評価に与える影響
3. 学会等名 日本コミュニティ心理学会第22回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hayashi, Y., & OKAMOTO, T.
2. 発表標題 The most memorable travel experiences from the point of view of travel career.?
3. 学会等名 XVI European Congress of Psychology., Lomonosov Moscow State University. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林 幸史・岡本 卓也
2. 発表標題 旅行キャリアの発達過程(3) 年代別でみた印象深い旅の経験と同行者
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林 幸史
2. 発表標題 旅行キャリアと最適な旅の経験(2) 旅行キャリアタイプからみた印象に残る観光経験
3. 学会等名 第34日本観光研究学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林 幸史
2. 発表標題 四国遍路の接待者(1) 発心の道場 阿波国篇
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡本 卓也
2. 発表標題 コミュニティと道
3. 学会等名 日本コミュニティ心理学会第22回大会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林幸史・岡本卓也
2. 発表標題 旅行キャリアと最適な旅の経験(1)
3. 学会等名 日本観光研究学会第33回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 林幸史・岡本卓也
2. 発表標題 旅行 キャリアの発達過程(2)
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡本卓也
2. 発表標題 観光旅行者のリピート行動に関する研究(2)
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡本卓也
2. 発表標題 観光旅行者のリピート行動に関する研究(1)
3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡本卓也
2. 発表標題 サードプレイスの利用は、生活満足度を高めるのか
3. 学会等名 日本コミュニティ心理学会第21回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡本卓也
2. 発表標題 観光旅行者のリポート行動に関する研究(3)
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 速水 香織	4. 発行年 2020年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 456
3. 書名 近世前期江戸出版文化史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	林 幸史 (HAYASHI Yoshifumi) (10567621)	大阪国際大学・人間科学部・准教授 (34429)	
研究分担者	速水 香織 (HAYAMI Kaori) (60556653)	信州大学・学術研究院人文科学系・准教授 (13601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------